

Dr. ジーアの My カルテ

全農家畜衛生研究所
クリニックセンター



豚回腸炎について

暑い日や雨降り等気候の移り変わりが激しい時期は、家畜の調子も上がらない事がありますね。こうした時は下痢・肺炎の発生による事故増加、発育停滞が気になります。今回は肥育豚の下痢として問題となるローソニア・イントラセルラリスによる豚回腸炎についてご紹介します。

●症状、原因菌について

ローソニア・イントラセルラリスによる豚回腸炎は当該菌の経口感染によって起こる豚の下痢症です。急性例は4～12カ月齢の肥育豚、繁殖豚で見られ、タール状の黒っぽい便を排泄し死亡率も高いといわれます。

解剖すると、回腸から結腸にいたる部分が赤く見られ、腸管の内側に出血が多く、粘膜の肥厚が観察されます。

慢性例は6～20週齢の肥育豚で見られ、ときどき軟便を排泄する程度で出血便は見られず、死亡率も高くありません。このような豚がいると一定の間隔で菌が体外に排出される事から、豚群の中で症状が長期化します。その結果、豚群全体の発育のバラツキが大きくなったり、飼料要求率の悪化を招きます。下痢が続くようであれば、検査を行い原因を確定します。

通常、検査では菌分離を行い薬剤感受性試験を実施しますが、ローソニア・イントラセルラリスは細胞内に寄生する特殊な菌であるため、通常的手法では検査ができません。よって、遺伝子検査で菌の存在の有無を確認します。当センターではこの遺伝子検査を実施しており、2014年度の集計成績では3～5カ月齢の肥育豚において10～20%程度検出される事を確認しています。

農場・肥育月齢によっては、下痢便を含む糞便からのローソニア・イントラセルラリス遺伝子陽性率が50%以上になる場合もあり、豚群内での当該菌の浸潤が高い場合も見られます。

検査によって肥育豚でローソニア・イントラセルラリスが存在し、豚群全体の発育等に影響を及ぼすと考えられる場合、対策にはマクロライド系の抗菌性物質使用が推奨されます。

しかし使用に関しては、使用期間と休薬期間の設定もあるため、獣医との相談が必要です。

●感染予防例

具体的項目には以下が挙げられます。①豚群のオールイン・オールアウトの実施：できない場合は、次回導入までの空舎期間を最低1週間程度確保します。豚の移動後には豚房の清掃、消毒、石灰塗布、乾燥を行います。発酵床豚舎の場合は床材の十分な発酵後の再使用も効果的です。②豚舎専用衣服、長靴の使用：他豚舎からの持ち込み、拡散防止のため、豚舎または肥育ステージ専用の衣服、長靴着用が望ましいです。③飼育密度、換気、温度の適正化：ストレスの低減を目指します。④豚群の健康状態観察：調子の悪い個体の早期発見・早期対応を行ってください。⑤ネズミ対策の強化：豚舎内での生息状況を確認し、効果的な駆除を検討してください。

ローソニア・イントラセルラリスによる豚回腸炎、特に慢性例では肥育豚群に対しての影響度合がつかめない場合もあります。日常管理の中で何かおかしいと感じた事がありましたら、かかりつけの獣医にご相談いただくとともに、必要に応じた検査を実施してください。

表.日常管理で見直したい項目

1	豚群のオールイン、アウトを実施しているか。または豚房ごとの空舎期間を最低1週間程度設定しているか
2	豚舎専用衣服、長靴を使用しているか
3	飼育密度、換気、温度の適正化に気をつけているか
4	豚群の健康状態の観察を毎日実施しているか
5	ネズミ対策を継続的に実施しているか